



他人に抱かれる妻は  
美しくて

基本CG20枚+差分  
本編142P+文字なし102枚



「んっ…やっぱりダメですか」

「ありがとう、いつもすまないな」

「いえ、私がいけないんです、もっとあなたを気持ちよくさせれば」

「めぐみのせいなんかじゃないよ」

俺は妻めぐみと結婚して20年  
子供もでき幸せな家庭も築き上げ  
順風満帆な人生を送ってきた



だが、その過程でにおいて仕事の多忙さとストレスで  
勃起障害を患ってしまった  
医者に通い詰めるもED治療薬の服用を進められたが  
自然に治す事を選んだ  
薬に頼ったり生涯薬だよりになるのが嫌だったからだ



医者曰く肉体的な原因はなく心理的な問題だという  
妻との営みを別なやり方で変えてみるのも治療の一つ……

露出SMそんな変態的な行為を  
愛しい妻にさせて嫌な思いはおさなくはならぬ……

これは俺自身の問題なのだ

「いいですが部長、これなら会議に通しても合格できると思っんですけど」

「味も悪くならしデザインパッケージは申し分ないけどな」

「何が不満なんですか？」

「味も問題ないし値段だつて手頃感  
大量生産するための設備の整備も今の十分対応できる  
コスト面ではだいたいお安上がり  
だが至って普通なお菓子だ……」

「じゃこの可愛らしいデザインは女性子供には受けれますよ  
味も他とは違いますし採算がとれるのは間違いありません」

「動物の形したお菓子なんてありふれてるじゃないか……」

「……」

「これだけでは会議に出したところで社長に面白くないっていわれるだけだ」

「なら彼のアイデアを取り入れると言っんですかっ……」

「このままだとそうなるな」

「それだけは絶対にイヤです！もう一度考えます！」

「時間はないんだ、考え直せ」

「失礼します！」

「あ……待ちなな……」



「はぁ…なんでこうなるのかね…」

新商品開発リーダーを任された彼が  
怒りを表したのにはわけがある  
人間関係でのイレギュラーが発生したのだ

リーダーの部下が受付嬢と社内で性行為をしていたのだ  
受付嬢はリーダーの彼女、恋仲だった大  
しかも浮気の現場をリーダー自身が目撃してしまったのだ  
そして部下はプロジェクトから降ろされたのだ

この部下は女癖が悪く間男と有名だ  
社内だけではなく営業してきた既婚者とも不倫関係になり  
トラブルにもなった事例がいくつもある  
男性社員から嫌われてる、誰とでも組もうとは思わないだろう

俺は問題児の部下を飲みだに誘う事にした  
やはり新製品には彼の力が必要だ



「部長から飲みに誘うなんてめずらしいですね」

「何かいいことでもあったんすか?」

「まあ、仕事にづいで話さるうと思つてな」

「げっ説教ですか止めてくださいよ」

「まあまあ」

怪訝な顔でこちらを見てくる

問題児こと、木原庄司

「主当たる節があるから説教をされると思つたんだろう」

「今度の商品企画でお前のアイデアを推進させたくてな」

「ああ、振ると粉がついて動物柄が変わるお菓子の事ですか」

「そうだ猫が豹柄になったりと子供の遊び心をくすぐる良いアイデアだと思う」

「ただの動物クッキーじゃつまらないですもんね」

「その意見には同意だ、だからこそお前にもう一度、グループに入ってもらいたいんだ」

「いやー……さすがに無理ですよ、あんな所を見られちゃったら」



「そうだな謹慎処分だけならいいが、会社内の心証は最悪だ  
だからこそ取り返さないといけない、わかるな？」  
「まあ……はい……」

「俺からリーダーに説得させるが、お前自身が変わらないといけない  
女癖を治せ、仕事に真剣に取り組めばお前の才能ならすぐ昇進だ」

「うう……」

「なに悩んでるんだ？仕事が好きじゃないのか」

「俺の性癖なんです」

「くっ……」



「人の女じゃないとセックス出来ないんです、おれ」  
「はぁ!？そっそれって、おまえ、何か?」種の病気なのか?」

「多分・・・他人の者じゃないと勃起しないんですよ」

「な・・・普通のセックスじゃだめなのか?」

「はい」

「それはダメだよ、本当にダメだ、女がらみでの問題は最悪・・・刺されるぞ」

「無理っすよ・・・普通のセックスじゃ勃起しないんですもん、どうしたらいいのか」

「んー・・・困ったな。それは困ったな」

普通のセックスだと勃起しないか

俺と似たような部分があるが

特殊な性癖で勃起するのなら

精神的な物なのかもしれないな

「何でまたそんな性癖を・・・」

「俺寝取り好きなんですよ」

人の物を美味しく食べるのが最高の蜜になるんです」

「最低だなお前・・・」

「でも・・・今回の事で反省しました」

「本当か?改心するのか?」

「はい」

うちの会社には手を出しません」



「当社でしないってことは他でするって事だろ  
反省してないお前、根本的にずれてるんだよ  
愛し合ってる人を奪うなんて考えは止めて  
健全な付き合いをしなさい」

「抱きなれた女を抱き続けるにはしんどいっすよ

一生ですよ？勃起もしなくなるし

一味つけるから勃起するんですよ

この女は好きな人が居るのに俺に抱かれヨガリ狂う

相手の男はせっせと残業してるのに俺に股間に夢中だなんて

最高のスパイスですよ。男として勝ってる気分になるでしょうっ？」

「なんでそんな考えになるんだらうな  
はあ……スパイスか……そんなのがあれば俺も……」

「ん？」

「課長も何か悩みがあるんすか？」



「……ああ  
あまり大きく言えないがな  
実は……」

「あーそれは男として大問題ですね」

「何かいい方法ないか？」

「俺も学生時代は健全だったんすよ  
でも中折れした時は焦りましたね  
でも、学内で人気な子だったんで  
他人から奪ったとスパイスを掛けたら勃起しましたよ」

「部長の奥さんにも寝取りのスパイス掛けたら  
勃起するんじゃないですか？」

「そんな無茶な……」

ふと頭によぎる最悪の考え  
こいつが俺の妻めぐみを寝取るとしたら  
その想像に俺の股間は正直に反応してしまった

（うっ……うそだろ……想像しただけで  
こんなものありえない……）

股間の反応が本当なのか確かめるべく  
庄司に話を誘導する



「俺は経験人数は一人だけだ  
妻もそうだ俺しか知らない」

「うへっ潔癖なんっすね」

「はあ！・・・そう捉えるのか  
お前とは対照的で幸せな家庭を築いた  
1人だけの女を幸せにしてみせろ」

「そんなこと言われても」

「庄司これを見なさい・・・」

「なんすつか？」

俺は庄司に家内の写真を見せた  
とても幸せそうに明るく微笑んでいる



「うひょーめっちゃ美人ですね！  
さぞモテたんでしょうね」

「言っただけの俺しか知らないって  
1人だけの女を幸せにしてみせる」

「でも奥さん可哀想ですね、抱かれてないんでしょう？  
きつと悶々としてますよ」

「だろうな。。。お前は人妻でも興奮するのか？」

「勿論っすよ人妻なんて欲求不満の塊みたいなもんですよ  
大抵の男は抱き飽きてるんでセックスレスがおおいこと」

「キスしただけでマンコ濡れ濡れ、愛撫しただけで  
潮吹きの水状態、チンコ入れたらヨガリ狂って  
もう最高っす！」

「庄司ことばに妻と重ね合わせ想像する  
するとどうだろうかペニスが勃起しているのだ  
それで核心した、庄司とは逆に  
俺は寝取られるのが性癖なのだ・・・」



「なあ・俺の妻に興味があるか？」

「え？なんすっかいきなり」

「もしかしたら俺はお前と逆かもしれない」

「どういう意味ですか？」

「お前が俺の妻を抱いてる事を想像したら  
あそこが反応したんだ」

「〜」

「いやいや…やめましょう  
イレギュラーなトラブルがあったばかりですし」

「今夜…家にこないか？」

「……まじっすか」



「かえったぞー」

「おかえりなさいあなた」

「お邪魔します」

「あらっ、そちらの方は？」

「部下の庄司君だ」

飯は外で食って来たから  
つまみ物を用意してくれないか」

「はい、わかりました」

「どうも悪いな」

「すみません、こんな夜分遅く」

「良いんですよ、全然人を呼ばないから  
社内で孤立していると思っていたので」

「おらおらよ、よしくれよ」

「やあやあ」



「浮気でそんな事に  
大変でしたね」

「部長やめてくださいよ  
奥さんの前で」

「はは」

やっぱり男だけじゃなく  
女性側の意見も聞くべきだと思ってね」

「まあそれもそうですけど  
もういいんですよ」

「私は一人しか愛したことないから  
そう言った話が分からなくて  
助けにはなれないわ」

「それは良い事ですよ  
僕は複数の人と付き合ってきて来て  
1人だけに愛されるより  
複数人と愛し合いたくなるんですよね  
満足できないっというか」



「まあそれも大変そうね  
寂しくて複数の人と関係とるの？」

「いや、どうなんですか？しょうかね」

「包容力がある人とお付き合いしたらいいと思うわよ」

「それはめぐみさんみたいな人ですか？」

「そうね！私みたいな人」

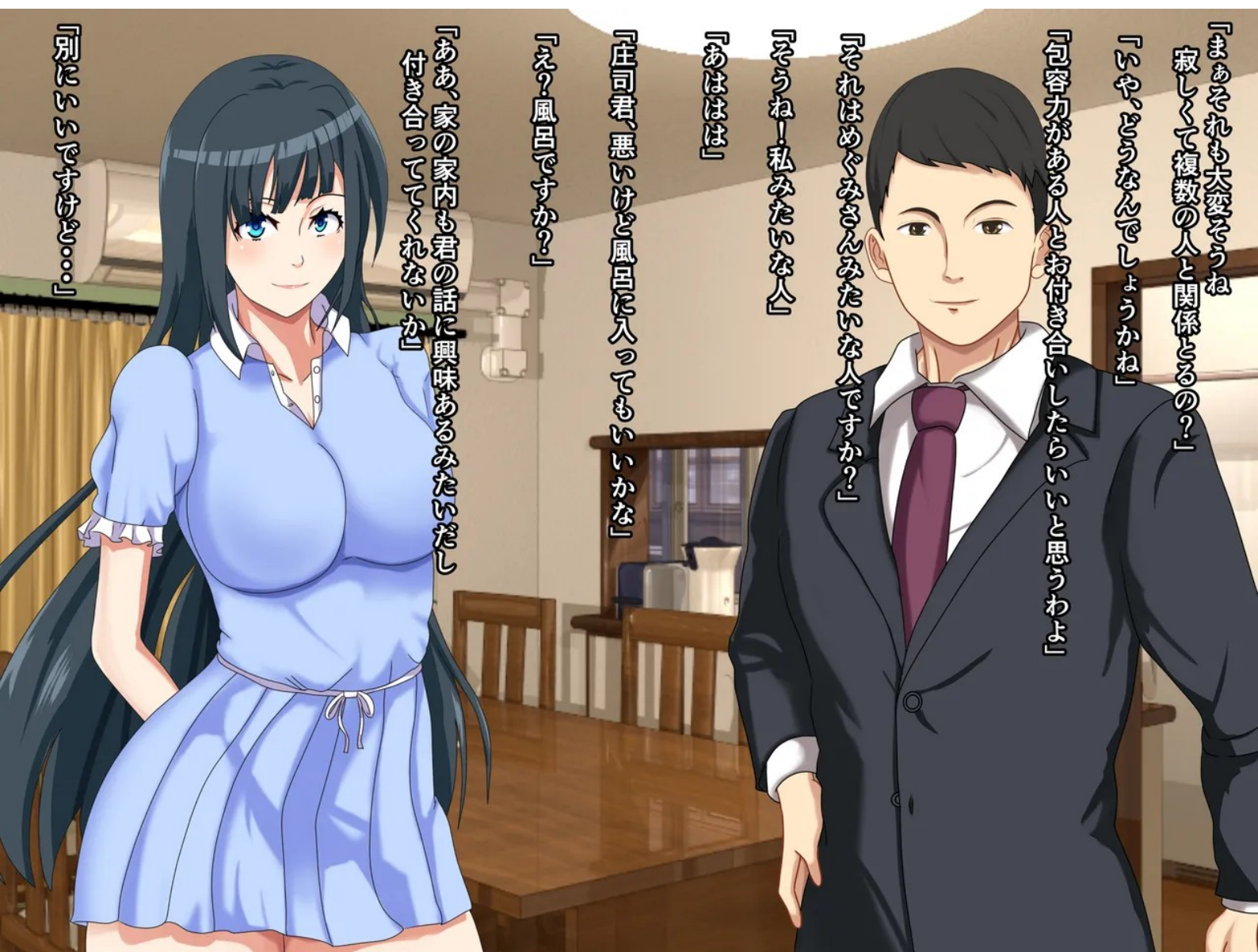
「あははは」

「庄司君、悪いけど風呂に入ってもいいかな」

「え？風呂ですか？」

「ああ、家の家内も君の話に興味あるみたいだし  
付き合ってくれないか」

「別にどうですか？...」



庄司と妻が話してるだけで  
俺の心がざわつき言い様もない不安が襲う  
そして股間が数年ぶりに勃起していた

風呂に入っている合間に  
妻と庄司がいかかわしい事を想像すると  
股間が熱くなる  
数年ぶりの自慰  
久しぶりの興奮  
部下に抱かれる妻を想像し射精する  
頭が真っ白になり快楽で体が痙攣する



「くっ……はあっ……はあ」

手に付いた大量の精液  
「最悪だな……妻が抱かれないと勃起しないなんて」

「なあめぐみ

庄司の事どう思う?」

「そうね、素直でとてもいい子よ」

「いい子か、何人も女の子を泣かしてきた輩だぞ」

「まだ子供だから女の子の扱い方がわからないのよ  
成長すれば貴方の様にうまくなるわ」

「はは、俺が女の扱い?冗談はよしてくれ」

「本当の事よ」

「愛しい女性も抱けなくなったインポの俺がね。。。」

「セックスだけが夫婦関係じゃないでしょ」

「それもそうだが

俺はめぐみを抱きたい」

「あなた・・・

大丈夫よ何時かきつと治るわ」

「実は・・・だな・・・

そのEDと関係した話をしたいんだけど  
いいかい?」

「え?なににかいいお薬あるの?」

「まあ薬と言うべきややはり

精神的な問題だったようだな」

「精神的な問題って

まさか心の病気を患ったの?」

「んー病気とは違うと思うんだ

めぐみが庄司と話してた時・・・  
勃起したんだ」



「ええー!?ど、どういうこと?」

「つまりだ、庄司という人間は

すげこましで女たらしだ

そんな人間が俺の愛してる妻を

抱いてるとを想像してしまうと興奮してしまうんだ」

「おかしいわそんなの」

「ああ、俺もおかしくなってるのかもしれない

だがこれが唯一の解決策なら試してみたいんだ」

「あなたまさか……!?」

「ああ……俺はもう一度お前を抱きたいんだ

お間の中に果てて繋がりたいんだ

馬鹿な事を言ってるのはわかる」

「頼む!あいつに抱かれてくれ!」

「やっやめて、あなた顔を上げてくださら」

「他人に抱かれるのが嫌なのはわかってる

無理強いはしたくない、きっぱり断ってくれてもかまわん」

「でも庄司さんはきつと断るわ

私みたいな四十になるおばさんを抱くなんて」

「あいつとはもう話をつけてあるんだ

それにめぐみの事を気に入っていたようだ」

「そっそんな……」

「たのむ……めぐみ……」



「私も…私もあなたの事を愛してるわ  
もう一度抱かれないと毎晩、ううん  
今もあなたに抱いて欲しいと思ってる  
だから、EDが治るのなら協力します」

「本当か…!?!」

「ですけど、わたしが他人に抱かれても  
あなたは私の事を愛し続けてくれますか?」

「当たり前だろ  
俺にはめぐみしか愛を知らないんだ」

「あなた…」



「ただいま。。」

定時に帰宅したが妻はいない  
庄司との待ち合わせに行ったのだろうか

もう事に及んでいるのだろうか  
気になってしょうがない

想像するだけでペニスはち切れんばかりに  
膨れ上がる

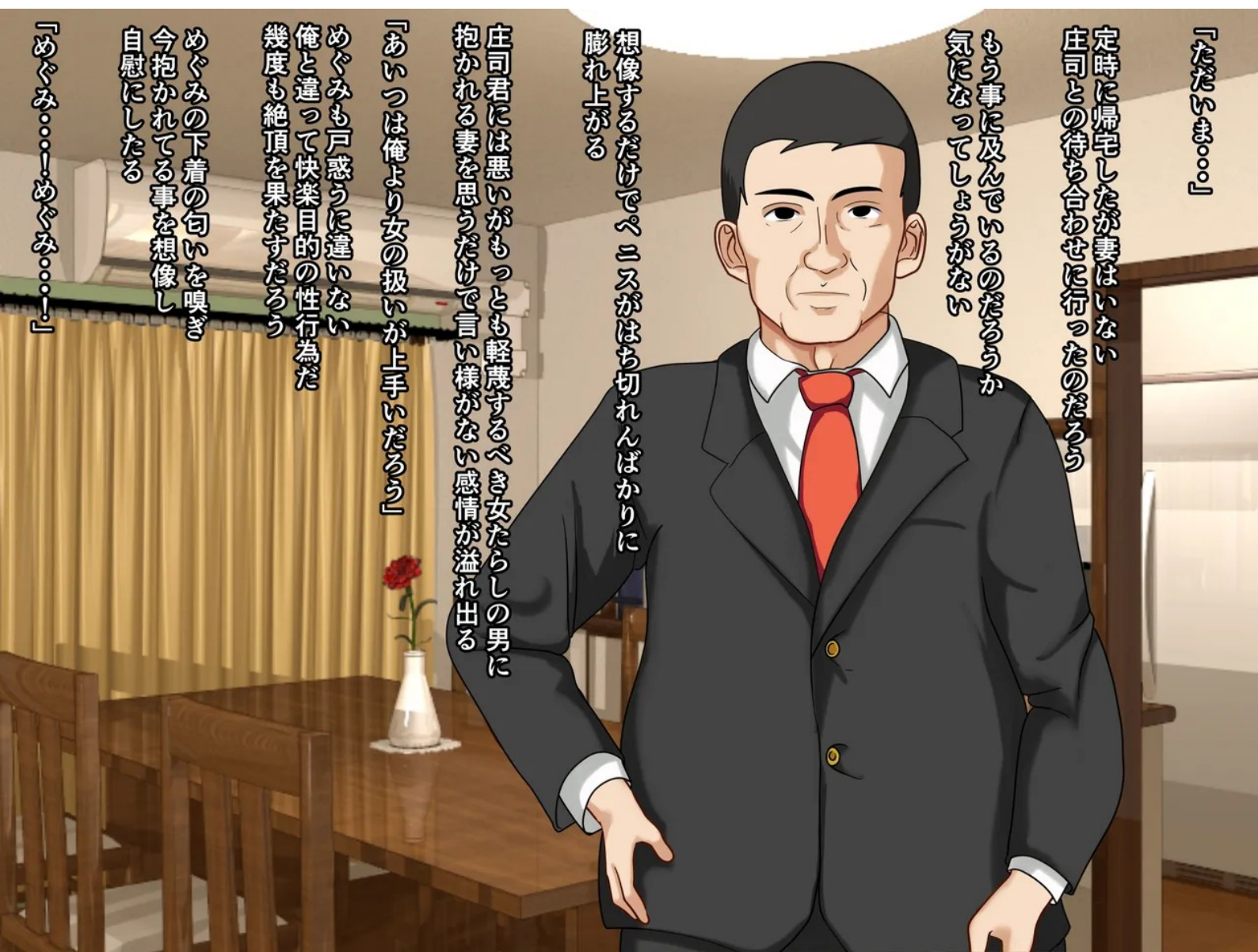
庄司君には悪いながらも軽蔑するべき女たらしの男に  
抱かれる妻を思うだけで言い様がない感情が溢れ出る

「あいつは俺より女の扱いが上手いだろう」

めぐみも戸惑うに違いない  
俺と違って快楽目的の性行為だ  
幾度も絶頂を果たすだろう

めぐみの下着の匂いを嗅ぎ  
今抱かれてる事を想像し  
自慰にしたる

「めぐみ……！めぐみ……！」



「ふう……」

ラブホテルなんて久しぶり  
それも旦那以外の人と来るなんて  
夢にも思わなかった

旦那に頼まれて  
仕方がなく嫌々請け負ったけど  
やはり怖い  
断ればよかった……

「見られるのよね、胸もあそこも……  
ちゃんと洗わないと」



「ん…」

久しぶりのセックス  
五年くらいはしてなかったはず

「ちゃんと濡れるかな…」  
確認を取るため  
あそこを指でかき乱す

「あ…ん…ん…」



「うそ……こんなに濡れてる」

セックスレスで欲求が溜まっていたためぐみはオナニーで自分を慰めていたその時以上に濡れて事に驚く

んっ

んっ

んっ

んっ

心理的には旦那以外と肉体関係を持つことに躊躇しているが肉体は正直で肉棒を受け入れる事に期待しているようだ

「私の体が欲しているの？  
他人のペニスなのに……  
ダメよそんなの浮気だわ……」



旦那の部下である  
庄司君が腰にタオルを巻いて  
ベットに腰を掛けていた

「奥さん遅かったですね。  
やっぱり不安ですか？」

「ええ、もちろん」

旦那以外の人と  
肉体関係を結んだことならいので

「はは、寝取り好きの俺に  
それ言っちゃうと  
チンコが元気になっちゃって  
興奮しちゃいます」

「えっ……」

彼の下腹部を見ると  
タオル越しでも勃起してるのが見て取れる  
旦那よりも大きい、  
それに自分に勃起してる事に  
嬉しい感情が湧き出てしまう

（なに嬉しいかと思ってるの、ダメよ）

「奥さん、さあさあお風呂で」

めぐみは小さく頷き  
庄司が居るベットで横たわる





「奥さん初々ですわね」

「ええ」

彼の意外な言葉にぎよんとする  
旦那と幾度も営みを重ね  
年も彼よりだいぶ上なのに

「ただ怖くから緊張してるの」

「どうしてなの、いもごが可愛いですよ」

耳元で囁きバスタオル脱がし始める

（見られちゃう私の全身を旦那以外に……）



「綺麗だ...」

自分容姿を褒められ  
嬉しくもありむす痒さもある

「部長が褒めしてくれ  
一人しか愛したことがなら  
この体なら理由もわかりましたね」

乳首を優しく愛撫され  
敏感に反応してしまう

「あっ……あっ……」

自分自身でわかるセックスレス以降  
他人におっぱいをさらけ出し  
乳首を愛撫されたことがないゆえに  
敏感になっているのだ

「これを感じるんだ」

指で乳首を跳ねて弄る

「やめて、乳首虐めなぞは……」

「おっぱい持たさず、さっさと挿れよう」

「ん……」

庄司の言う通り

めぐみは見透かされている  
女慣れしてるだけあって年上でも  
いとも容易く扱う

皿に盛りつけられた刺身の様に  
一枚一枚食べられていく

おっと違う愛撫の仕方に戸惑うが  
新鮮で優しく弄る事で心地よさもある



しだいに手つきが下の方に行き  
指で茂みをかき分け  
秘部に手がかかる

「はうん」

「いっすいっ濡れてますね」

「そんな事をします」

「本当にそうかな？」

庄司の指が膣口をさすりあげ  
ぴちゃぴちゃと水の音が聞こえる

「この聲はどこから  
聞こえて来てるんでしょっかね？」

ワザとらしくめぐみに問いたたし  
旦那以外の手で濡れてる事を自覚させようとして  
庄司の性癖が出始めた

「しっ知らないわ、ダメなのっ……んっん……」

あ

ん

くちゅ

くちゅ

くちゅ



「見てください僕の手、  
ただ触ってただけなのに  
こんなにも濡れてる」

指の先から滴り落ちるめぐみの愛液  
否応にも自覚させざるを得ない  
旦那以外の指で濡らしてる事に

「僕とのエッチに少し  
期待してたんじゃありませんか？」

「ちっ違います  
これは旦那の為に  
やってることで  
決してエッチしたいからとじゃなく」

「初めてお見えた時、  
はつきりわかりましたよ  
発情したメス猫みたいに  
ムンムンとホルモンを撒き散らしてた」

「そんな発情なんて、してませんっ！」

「強情な奥さんだ、すっくかわらな」





庄司はめぐみの股間で顔を当て  
舌でクリトリスを上下に愛撫する

「だっだもー！  
旦那もそんな汚い事  
したことをさ」

「へえー……  
部長もしてないのか、  
なら初めて貰っちゃいましたね」

「いやああん！  
なにっこれっだめさっ……」

クンニ刺激が初めてのめぐみは戸惑う  
旦那もしたことがない愛撫を庄司は  
簡単にこなし始めるのだ

ちゅっ  
ぽろ  
ぽろ



ぢゅるぢゅる

ぢゅぶぢゅぶ

クリトリスを口で吸い上げ  
パキユームみたくクリをすすする  
音が鳴る

「やああんっこんな知らないの  
だめっっ庄司さんもう堪忍してえ！」

めぐみの懇願も庄司は聞き入れない  
彼が今からする事は  
旦那以外に昇天を迎え入れる事だ  
愛の壁(理性)を壊し本能まま  
男に委ねさせるのが目的

「だめっだめええんっ」



「んんんんんんんん！」

庄司の執物なクンニで  
めぐみは旦那以外の  
男でオーガズムに達してしまう

快感が一線を越えた時、  
体がのけぞり痙攣する  
ここまで感じた経験は  
旦那でもなかった

んんん

んんん

んんん

快樂の波が引き余波に慕う  
未だ極楽が収まらずビクビクと震える  
「あっはっああっ……」

「旦那以外で初めてイッちゃいましたね  
ちゃんと報告してあげてくださいね」

「あなた……いめんささ……はあはあ」

「謝る必要なんてありませんよ」

これは治療なんですから

初めてクンニされて

旦那以外の愛撫でイキましたなんて

きつと部長も喜びますよ、主でチンポが

「クスクス、やめて笑わせなさい」

「ね、だから今は楽しませよう」

彼の言う通りこれは旦那も

承諾してる治療なのだ

私自身が強張って

緊張してたら何のために協力してるのか

本来の目的を失うところだった

めぐみは庄司の回車に乗せられ  
体を委ねる事にした

それは旦那の為に浮気セックスを

楽しまなくてはならない

改めて決心がついたようだった



「見てくださる奥さん、僕のおちんちん  
早くおマンコの中に  
入りたいって涙を流してるでしょ？」

「あぁ。。。大きぢ」

恍惚な表情で旦那以外のペニスを見入る  
太さ長さそして亀頭の力りの大きさの違い  
人によってこんなにも  
違うものかと食い入るように見つめる

(こんな大きいペニスを  
私の中に入れてくるの？  
そんな事されたら私)

めぐみがそう思うと  
キュンと子宮がうずくのを感じる

(私の体がこのペニスを入れたがってる?)



ずぶん

ゴムを装着しめぐみに  
覆い被さり自然と正常位になる

「奥さんのおマンコに今から入れますね」

「はい、受け入れます」

庄司の硬いペニスめぐみの中に入り込もうとするが  
濡れているとはいえ数年間も閉じていた穴  
庄司も入り口のキツさに驚く

「奥さんのおまんこキツイですね  
少し力を入れますね」

重心を腰に置きめぐみの  
マンコに突き入れられる

びくん



「はっん……あぁあっ……！」

久しぶりペニスに  
思わず嬌声が出てしまっ

「奥さんの中、気持ちさらさらですよ。四十代とは思えない  
膣の締め付け  
おちんちんが入ってるのわかりますか？」

「んっ……わかる、  
奥まで届けてるのが感じて取れるっ」

「それは良かった、  
部長と俺のちんぽの違いを感じ取って  
報告してくださいね」

旦那のペニスはどらだったのか  
曖昧な記憶しかない  
だが庄司のペニスは  
はつきりとカリと  
竿の凹凸部分がわかる  
きつと旦那よりも  
気持ちいいのだらうと  
少しばかりシヨックをうける  
愛とか関係なく  
感じてしまうのだと

「動きますね」



「んあっああ、  
あああっ！ああっ！んん……」

「痛くないですか？」

「んっ……はいっ……あっ」

私の中を優しくゆっくと出入りしてる。久しぶりのセックスだから、気を使って丁寧に腰を動かしてる。自分余がりで性欲任せの性行為じゃない。

優しい子……旦那の聞いてた話と違く、雑に扱ってる印象を受けていたが、彼がモテる理由が少しだけわかった気がする。

「はぁんあぁっ……♡」

大きく硬いペニスが  
ゆっくりと根元まで入ってくる

「んはっ……あぁっ♡」

「奥さんすく濡れてきてますね。もうびちよびちよび  
シートに染みが着ちやうとしますよ」

「あんっ、ふぁあっ！はぁん」

深い所を突いて、自然と声まで漏れてしまっ  
旦那のセックスが当たり前なめぐるみにとって  
性行為がまったく違う事に戸惑っ

(私の気持ちいい所を的確に攻めてくる  
どうしてわかっちゃうのっ)

「あっ……んっ……はっ……  
やぁ……あぁっ！」





「おはなさんー!」

Wk

Wkhn



頭が真っ白になる  
セックスで久しぶりの高揚感  
若い男性の雄々しい硬いペニス  
40にもなるのに  
性行為の全てが初めてに  
感じてしまうほど刺激的だった

「めぐみさんのイッた  
顔すごくかわいいですね」

まはま

「んん…見ちゃダメ、  
おばさんをかからかわならぬ…」

「キスしてさあな」

PIV

PIV



庄司がめぐみの唇を奪うように  
顔を近づける

惚けてためぐみだがハッとし  
キスを拒む

「だめっ」

「え……」

めぐみの意外な行動に驚く庄司  
ペニスで果てた女性は  
大抵拒むことはせず  
受け入れてきたが  
めぐみの場合は違った

「ごめんなさい、  
キスは旦那専用にしたの……」

「そうですか、  
何か強い思い出があるんですね」

「……」

キスに思っていないただ  
唇を重ねるのは好きな人だけと  
めぐみの意思なのだ



庄司が腰を動かす  
先ほどとは違う動き

「あぁっ……違うっ……なんだっ……」

「めぐみさんの膣が  
僕の形になっってきたからですよ」

「ふえっ……かたじけなくっ……」

「そのまま部長の形をしてたんですよ  
たとえ何年セックスしなくても  
だからさっきの腰の動きは  
僕の形に馴染みさせるための準備運動」

「あぁっそんなっ……あぁっ！  
やめてっ旦那にバレちゃうっ！」

「帰ってきたら部長に  
抱かれてまた形を  
変えればいいんですよ」

「そんな不埒なっ  
あぁあっんん！」

「何をどうもやろうっ  
旦那の望みですよっ……」

あ

あ

「めちゃっっんっ！」



優しく繊細な腰の動きと違って  
性欲任せにペニスを突き叩きつけてくる  
獣の交尾の様に……ただ孕ませるための動きだ

「あぁっ、ひぐらうーんんっ！」

だがめぐみはその獣様に子孫を残すためだけの性行為に  
びったりと相性がよく先ほどから軽く二回ほど絶頂を  
迎えて入っていたのだ





「あーっ……たーん……たーん……」

「たーん……たーん……」

「あーっ……たーん……たーん……」

「たーん……たーん……」

「僕もそろそろ……限界だ……」

「あーっ……たーん……たーん……」

「たーん……たーん……」

「あーっ……」

「あーっ……」

「あーっ……」

「あーっ……」





「ほら見てください、  
こんなに精子をしたの初めてかも」  
「あ……ふんふん……」

ロンドームはズンズンに膨れ上がっていた  
「こんな大量の精子で中出しされてたら  
きつと孕んでいたら……んっ……」  
精子を見てたら子宮が疼らちゃっ……」

「今日はこれくらいでしてしまっしょうか  
セックスも数年ぶりだったようなので  
無理はダメっすからね」

「うん、ありがとう庄司君は優しいのね」

「はは、よく言われるけど  
男からは悪魔みたいに見られてますけどね」

「んふふ、そうかもね」



「ただいま」

めぐみが帰ってきた  
恐る恐る玄関に行く  
そこには普段と変わらないめぐみの姿  
それもそうだ  
たった一日で変わるはずがない

「おかえり、まってたよ  
夕飯用意してたよ」

「あなた、ありがとう」

めぐみの笑顔  
妻は抱かれてきたのだ  
俺以外の男に  
そう思うだけで心臓がバクバクと  
鼓動が大きくなる  
そして股間も熱いままだ

「その……めぐみ問題なかった」

「あ……うん、その優しくしてくれから」

「どうにか……そうか」

ホテルでシャワーを浴びてきたのだらう  
石鹸の匂いが漂う

した……

確実にめぐみは抱かた  
庄司に抱かれてきたのだ



「今日は疲れたら明日は休みだし  
ゆっくりとホテルでの出来事を  
教えてくれ。」

「んん…」

本当は今にでも押し倒して  
庄司とのセックスがどんなのか  
聞き出したいが

めぐみが最優先  
精神的にも疲れてるに違いない  
今日は休ませて明日はたっぷりと…愛し合いたい



「んっちゅっちゅ…」

互いに唾液を交換する熱い接吻  
夫のペニスはすでに大きく膨らんでるのがわかる

「あなた…」

「めぐみ聞かせてくれ…  
どんなセックスだったんだ」

「最初は戸惑ったはだってあなた以外と  
性行為なんてしたことないんだもの」  
「ああっ怖かっただろうにすまないな」

「んっ…でも庄司君は私を優しく導いてくれたの」  
「どんなふうなんだ？」



「仰向けに寝て私のバストオルの脱がすの」

「わたしの裸をみて庄司君が綺麗だって

その時私嬉しくなっちゃった

だって40の裸体よ……

若い子に言われて嬉しくならない

人なんていないわ」

「そして私の乳首を弄るの……

こうやって指で丁寧だよねて

そのあと指をはじらて虐めたり」

ん

ふは

ふは

おは

ん

ん

「優しく強く優しく強く、  
それだけで私濡れてきて  
胸で感じる事なんて  
今までなかったのに……」

妻が庄司との成り行きを説明していく  
それが凄くリアルで愛撫されてる姿が  
目に浮かぶ

「彼の手が胸から私股間に向かって  
私の……わたしのおマンコを触り始めたの」

「濡れているのがすべすべして愛液を見せつけて  
やだ……思ひ出すだけはやめろ……」

「そんなに濡れていたのか」

めぐみは小さく頷く  
よほど恥ずかしかったのだらうっ  
こんな表情をするなんて

「ねえ……あなたは私のおマンコ舐められるっ」

「あ……まさか……おまんこ……」

「うん、私はじめて男の人におマンコ舐められたの」



「……」

「彼が私の股と股に挟まって  
クリトリスをこすりやうて……んっ……  
舐めて……私の味知られちゃった」

「なっ……ん……」

付き合ってた時に嫌がってたのに  
舐めさせられたのか  
俺のときは拒否して庄司の野郎には  
おまえの花の蜜の味を舐ってしまったのか」

「ごめんなさい……あなた……」

「うう……!」

嫉妬で胸がざわつく  
初めてを愛しのめぐみのおマンコを  
舐められた!

くちゅ

くちゅ

ずん



俺はカッとなりめぐみの股に潜り込み  
庄司と同じように  
めぐみのクリトリスを舐め始めた

「ぎゃっーあなた何を」

「うるさいー俺も舐めるんだ！  
俺だけのマンコなんだ！」

あー

ちゅっ  
ちゅっ

んー  
んー



「うっわっわっわ 舐められたんだろー!」

「あああ あんんんっ……どうっすっ 妻くーに 舐めて 私のクリトリスも吸ってたっ」

「それが気持ちよくなってっ わたしそこっでイきました」

「なんだって!」

あぁ

んっ

ぢゅる

ぢゅる

あっぱ



めぐみの言葉に負けじと  
クリトリスを吸い込む

「んあああっ！あなたあああ！激しいんっ！」

めぐみのクリトリスを真っ赤になるほど吸い上げる

せゅ！

「ひゅっうん！あなただっつゅっうん！」

あむ

あああ

せゅ



めぐみは言葉通りに旦那のクンニで絶頂した

「今日のあなたすごいわっ…」

「こんなにも愛してくれるなんて」

「まだだよ。これからだ」

「さああいつはセックスしたんだろ」

「続きをっ続きを話してくれ」

「庄司さんとの行為に及ぶまでに  
おちんちんを見せつけられたわ…」

「ぞっそれで…あらっのほほれんららら…」

「凄く大きかった、赤黒くてカリも太く竿も長く  
一目でわかった…」

「あなたより雄々しいペニスだって…」

「めっめぐみは…その…ペニスを見てどう思った」

「こんなに入れられたらと思ったら体が反応して…  
子宮が疼いちゃった」







「ああああっー激しいっっあなたっもっとゆっくりっっ！」

「俺のめぐみをこっちやっつてーこっちやっつてー！」

激しくめぐみのお尻を腰でたたき上げる  
旦那との数年ぶりのセックス嬉しさよりも  
性に溺れて食欲なまでも食べる姿に怖さを覚える

「イッたのか庄司のペニスでイッたのか!？」

「ちっちぎましたっーああっっっっああああっっ」

「何かいいッたんだめぐみ」

「四回も中イキさせられたのっっ」

「くっっっっっさおおー！」



「あーっ  
あーっ」

パニ  
パニ  
パニ

嫉妬に燃え、より一層深くめぐみの中を突く

「ごめんなさい、あなた怒らなごっ」

「怒ってなんかいるものか！俺はただっお前を愛してるだけだ！」

「んあああっ！くうあなただっ！ちゅちゅっ」

「さっしー！一緒に俺ご……ごっ」

「あなた私のまんご気持ちささっ」

「ああっまもささささっしゅんへー」

「よかった……庄司君のチンポに形を変えられてたからっ」

「ごっ」





「く…はあはあ」

「あなた…気持ちよかったわ…すく」

「どっちが…どっちが気持ちよかった」

「もちろん…あなたよ」

めぐみは嘘ついている時は目を反らす  
きつと庄司の方がセックスが  
気持ち良かったのだろう



無事妻とセックス出来た事を報告とお礼をするため庄司と食事をとることにした

「お前の協力で無事、妻と営むことができたよ  
ありがとうな」

「それは良かったです、僕も部長さんの  
奥さんを抱けて幸せでした」

「そうか、妻はお前のセックスが気に入ってたみたいだぞ」

「セックスだけには自信があるので褒められて嬉しいです」

「自分も妻もお互い初めて知った事が多かった  
なあよければまた寝取られプレイに付き合ってくれないか」

「僕は別に構いませんよ、むしろ喜んで付き合いますよ  
奥さんを抱き続けければ……一人だけの女性を愛することもできそうですし」

「ほお……俺たちだけじゃなく、お前も変わり始めたのかな」





庄司はベットに横たわり  
めぐみを招き入れる

「奥さん今回は僕の上に乗って  
思うがまま気持ちよくなってください」

「えっ庄司さんの上に乗るなんてはしたないです」

「そんな事ないですよ、  
騎乗位を覚えたら旦那さんも喜びますよ」

「…それを言われると」



庄司の上に覆い被さる  
ペニスを手でつかみ  
改めて大きさに驚く

(こんな大きいのが私の中に入るんだ)

「ゆっくりゆっくりですわ」

「はっはっ…」

ぬちっ…

ギッ





言われた通り  
腰を動かすも初めてどう動かせばいいのかわからず  
ぎこちないく上下にピストン運動をする

「んっ……くっふうん……」

「いいですよ最初はゆっゆっ……」

「はぁ……あっ、あんっ、んっ、」

女性主導のセックスは難しく中々形にならなかった

(どうしよう……あまり気持ち良くならな  
きっ)と庄司君も同じだわ

「めぐみさん上半身を僕の胸に寝かせてくださる  
やり方を教えてくださいよ」

「あっ……は……」

ぬちゅ

ぬちゅ

ぬちゅ



めぐみは庄司の胸に上半身を密着させる  
繋がったまま至近距離になるは初めて  
鼓動が大きくなる

（庄司さんの匂いがする。。。すっくすっくキキキしちゃっ）

「上下だけのピストンじゃなく前後にスライドしたりするんです  
試してみましようか」

庄司はめぐみのお尻をつかみ  
基本動作を教える事にした





「んっっ…あああ庄司さん…」

「スライドする時は股間を密着しない様にしましょう  
骨同士がぶつかって痛くなるので」

「はっ…んんっ…」

「僕が手で動かしている様だ…覚えてください」

「ああっ…っっ…庄司さんのペニスが感じる」

「そうでしょ、次は円を描くように  
ペニスを膣壁で刺激してあげてください」

あああ

あ

ズッ  
ズッ

ズッ  
ズッ

くちゅ…

くちゅ…  
くちゅ…  
くちゅ…









「ああっんーはびびりっすっ」

「おれちやうどーはっんー」

庄司は腰を上下に激しく叩きつめ

ぬるっ

めぐみのポルチオに命中させる

すちっ

「あちあちっんんー」  
がっちりと掴まれたお尻に激しいピストン  
めぐみのピストンとの違いを見せつけられっ

（すんっ・庄司さんの腰使い……こんなにも違うなんてっ）

めぐみは庄司のセックス指導され尊敬の念を抱く様になる

「あちあちっんんー庄司さんさっすっ」

あちあちっ



「~~~~~」

んっ

んっ



「はあはあ…庄司さんすごかった…」

「めぐみさんのマンコも良かったですよ  
今夜、旦那さんに僕が教えた腰使いやってみてくださるね」

「セッ…」

セッ…

セッ…

「めぐみ、これは……どういう事だ……」

「庄司さんに教えられたの……あなたが悦びそうな事を」

「あいつが？」

めぐみは俺にまたがり  
騎乗位の格好になっていた

(そうか、庄司と騎乗位プレイをしたのか……)

「めぐみ・庄司に教えられた通りにやってみてくれ」

「んっ」



めぐみは俺のペニスをつかみ  
腰を落としてゆっくりマンコに棒を飲み込んでいく

「おっおっおっ」

自らマンコにいれるのとは違ってめぐみから入れるのは  
新鮮な感触だ

「あなた、動きますね」



庄司に教わった通り上下にピストンをする

「くっこれは凄うっ…」

ペニスがめぐみのマンコに出し入れするところ  
めぐみの表情に豊富な胸が揺れてる  
全てがあらわになる

「あっんんっ…はあっはあ…！」





「あなた、気持ちいい？」

「あっああ…すごいよ…こんな風に  
庄司の上に乗って腰を動かしてのか」

「うん、庄司さんに  
いっぱい教えてもらったの」

「はは…これは凄いな…うう…！」

「一時間も丁寧にゆっくりに…あっはあ」

くちゅ

めふっ

ぽん

ズンズン

ぽん

「なっ一時間も…」

「一時間もめぐみと繋がっていたと言う事かっ！」

ズンズン

嫉妬心でみると股間に熱をおびていく



ハグチツ

おふっ

びん

ズツ

「こうやって円をかいてペニスを気持ちよくしたり」

「ああっ！これはたまらんっ……！」

「それで腰をスライドしておちんちんを悦ばしたり」

「はおおっ！」

「庄司に教わった技を次々と披露して来るめぐみ」

「めぐみがこんなエッチな妻になるなんて嬉しいよ」

「あなた…最後は密着して一緒にいきましょう」

パツ

ハグチツ

ズツ

ズツ





「あああああっん！」

ひゅん

ひゅん

どひゅんひゅん  
ひゅん

「んっ……あなたの精子いっぱい入ってきた」

「はぁはぁ……すごく良かったよめぐみ……」



「私も……一緒にイッてよかった」



「えっ電話ですか？」

「ああ、次は電話越しで妻の声を聞きたいんだ」

「部長、凄いですね・・・」

部下に軽く引かれてしまった  
それもそうだろう部下と妻の浮気セックスを  
電話越しに聞きたいなんてどうかしてる

「この事は妻には内緒としてくれ  
あくまでも自然な浮気がみたいんだ」

「わかりました、でも止めようとしてたり  
しないでくださいね」

「ああ・・・任せます」



通話を来るのを待っている

「ふっ…」

緊張する

妻が他人に抱かれてる喘ぎ声を聞くことが出来る

今までは想像だった庄司とのセックス…

妻がどう感じて俺のセックスより何が違うのか…

プルルルルル…

携帯の音がる

生唾を飲み込みゆっくりと

スマホを手取る

「ふっ…」

震える指で通話ボタンをタッチする

「ダメッーはああああああああんん！ああっああんん！」

いきなり聞こえたのは妻の嬌声だった



めぐみの喘ぎ声に動揺してしまう

「この声は……めぐみのか……」

「はぁ……んん  
いぐうううー！」

「またイツちゃううー！」

「めぐみさん

イツていいですよ！

ほらほらー！」

「ああっあああんっ！

いぐうううううー！」

「あっ……はぁっはぁ……んん……」

「これでイッたの何回目ですか」

「わっわかんない……」

「僕のチンポとめぐみさんの  
マンコ相性良いみたいです」

「あっ……うん、

庄司さんのチンポすごくいいのお」

「はぁ……んんっ……あああっ！」

庄司は俺のセックスをめぐみに  
比べさせストレスを掛けている様だ

その効果は抜群で手も

使っていないのに俺のペニスは  
二人の会話だけで射精に導かれていた

「旦那さんに申し訳ならと思わならんのですか？  
こんなで耳れて」

「んうっ、ひああっ、だって  
旦那が抱かれて来りって言われてるから  
あああっん！」

「そうですよーね！  
旦那さんがもっと僕と  
愛しあって来りって言われたんですもんね」

「うんっあっはああっんん…！  
んああっーああー！」

そう私が性に溺れてるのは旦那のためっだから  
いっばいエッチしてもいいの…  
もっともっと庄司君のペニスをおマンコで感じたいっ

「あああっん！」

「めめめんん…んっあ回らっ」

「んっ」











生だとーっ？そっそんな事  
俺だけしか知らない妻の膾炙を味わうと言うのか……っ

「だっだめだー断ってこれめ々々……っ」

「この生チンポボロイメンロをぐりぐりされたら  
もっとう保持ちよへなっつます」

「……っ」

「ねっ生セックスきもちららよ」

「あ……」

「め々々……どうしたんだ？断ったのか」

「……っ」

「……」









「僕もイキますっ……中田くまひらっ！」



「あゝんっ……生中田くまひらっ……」

繁殖目的の乱暴な腰打ちをする庄司  
メス猫みたく嬌声をあげる

あゝんっ

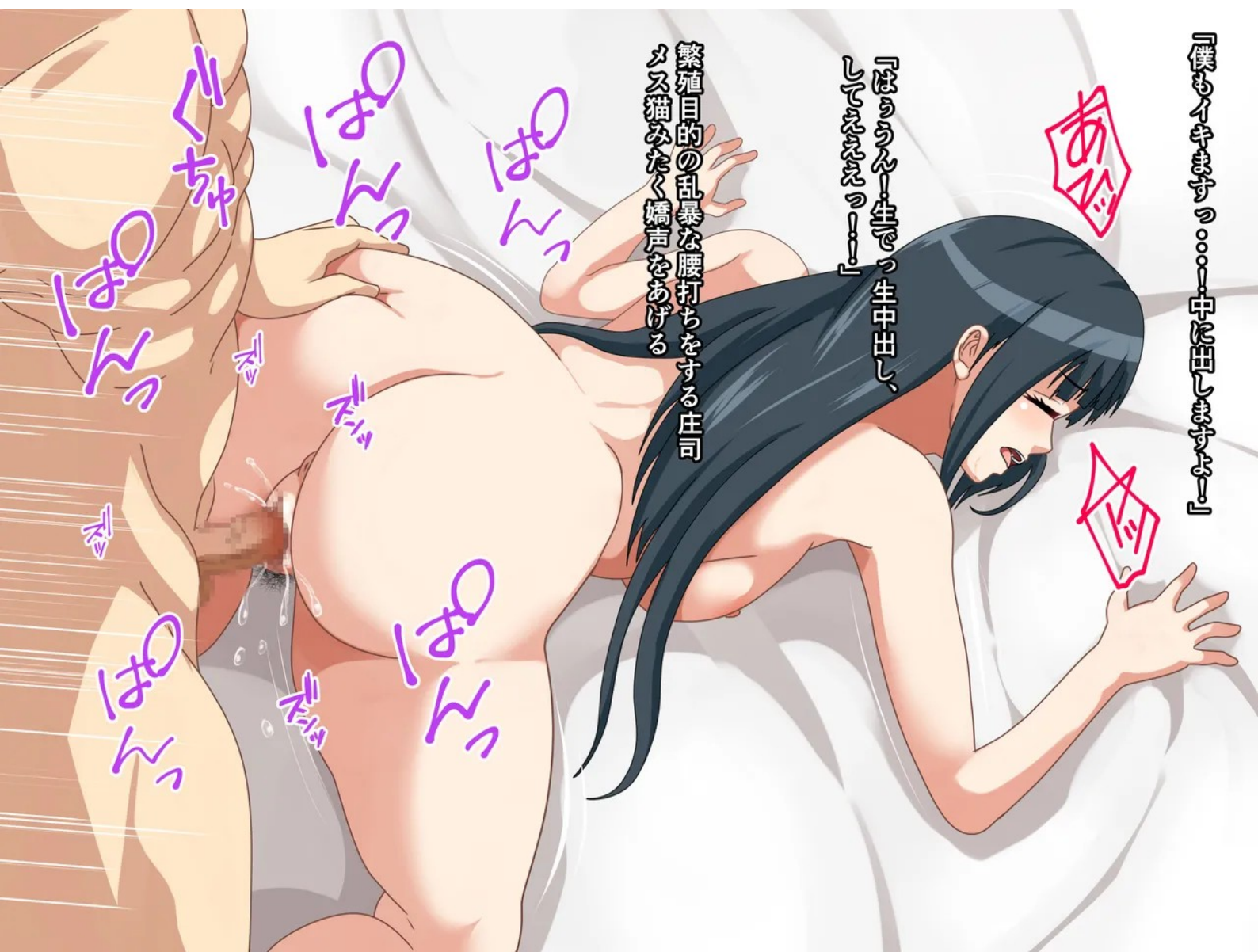
あゝんっ

あゝんっ

あゝんっ

あゝんっ

あゝんっ



「あああああああああああー」

主人じゃない熱い精子が子宮奥深くまで降り注ぐ



ペニスの射精は一滴も残さないよう  
脈を撃ち続け膣内は精液と愛液が混ざり合  
結合部分から白濁液が漏れ始める

はあ

はあ

「んはあ……んん……」

「うん、良かったよ  
おんがのこの生ハム」

ヒクッ

ヒクッ

ヒクッ



「んあ……すごい精子……」

庄司は中出しされたマンコを  
スマホで撮り始めた

「えっ!? 庄司さん何をっとりならいで!」

「ふふ、この画像を部長に見せてあげますよ!」

「そんな事したら主人が怒っちゃうわ!」

「怒りませんよ……僕が中出し宣言をしたのに  
止めに入りませんでしたからね!」

「……どう言う事?」

「部長に奥様の生の喘ぎ声を聞きたいと  
言われたのでスマホから通話させてもらってました!」

「そ……そんな!」

「ど、言うわけで送信っ!」



通話が切れた後  
一通のメールが来た  
そこには妻が中出しされた証拠の画像だった  
妻がどんな状況なのか聞くため  
電話を掛ける事にした

「めぐみか？」

「……あなた、見てしまったの？」

「ああっ中出しされた画像が送られてきてな」

「安心して庄司さんに避妊薬を貰ってたから  
妊娠しないわ」

「ああ、そうなのか……ところで中に出されて  
どうだった……俺より気持ちよかったか」

「そっそれは……若くて逞しい雄のおちんちんだから  
生も気持ちよくて膣内に射精された時も  
一瞬、意識が飛ぶほど気持ちよかったわ……」

「そっそうか……俺より気持ちよかったって事か」

「はい……あなたのチンポより庄司さんの生チンポの方が  
数倍気持ちよかったの……でも信じてあなたの事は  
愛してるのよ」

「ああ、わかってるよ……俺も愛してる」



俺の欲求は徐々に強くなってきてる  
庄司に送られてきた生中出しの画像  
あの画像のお陰でより一層深くなる

二人の絡み合い結合した部分が見てみたいと.....

そこで二人に頼み  
庄司もめぐみも  
セックスするところを  
見せてくれることを承諾してくれた



二人は事前に入り  
俺は後から部屋に入る事になっている

数十分が経ち  
俺は意を決し中には居る事に  
ドアを開けた瞬間声が漏れてきた

「ああああっ……ふああああっ……ああっ！」





立ちながら後ろを腰で打ち続けられる  
一度もしたことがない体位  
いつもは正常位したことがないので  
彼女はこんなにも容易く受け入れていた

そんな妻の姿を見て勃起し  
ナニを弄り始める

「ささのか、めづみ、その男が気持ちいいささのかー」

「心不貞に自慰行為する俺と強化するようにな  
めづみも話す

「ささのかー、主人の気持ちいいおっぱいささのかー  
めづみもささのかー、おっぱいささのかー、おっぱいささのかー  
おっぱいささのかー」

「めづみささのかー……ささのかささのかー」





お前の胸を揉むと気持ちいいよ

「お前の胸を揉むと気持ちいいよ...  
お前を揉むと気持ちいいよ」

「お前の胸を揉むと気持ちいいよ...  
お前を揉むと気持ちいいよ」

「お前の胸を揉むと気持ちいいよ...  
お前を揉むと気持ちいいよ」









「んあっ……はあん……ああ……」

ほとほと大量の白濁液が  
股から流れ出る

あぁ

あぁ

「奥さん、汚くなったから洗いっこしましょ」

「め……」

クンぽ……

二人が出てきた  
めぐみは俺がチンポ丸出しに驚愕した

「あ、あなたいつの間に……………」

「つい先ほどな…………お前たちが絡み合ってる姿を見て興奮したよ…………」

「部長来てたんですね、タイミングも良かったみたいで」

「ん、ああっ二人ともすごく気持ちよさそうだったな」

「部長本番はこれからですよ、これを見てくださら」



庄司が手に持ってきたのは制服の様だ

「なんだこれは？どこがで……！」

これはめぐみに通っていた時の学生服……！！

「めぐみさんに頼んで持ってきてもらってんです」

「まっまさか……お前たちこれを着て」

「なりそめ聞きましたよ」

めぐみさんはまだ学生で部長は大学生……  
セックスはめぐみさんが卒業してから……とても健全だ」



「さつめぐみさん、制服着て来てくださる」

「はっはっ」

「だめだ！それだけはダメなんだ、汚しちゃいけないんだ」

「あなた……」

「知ってますよ、綺麗で清純でお淑やかなめぐみさんを汚すまいと学生服姿のめぐみさんに手を出さなかったいや、出せなかったんですよね、あまりにも綺麗だったから」

「うっぐ、思い出なんだ、とても大切な」

「でも今らか僕に抱かれる事を想像してペニスがガチガチになってますね」

「……」



めぐみが制服姿で現れた  
あの時と変わらない綺麗な美しさを保っている

「すごく綺麗だ、部長さんが  
付き合っていてても手を出さなかった理由も  
わかる気がしますね」

「そんな、庄司君お世辞ばかり……」

「見てください部長の  
股間から我慢汁があんなに垂れていますよ」

「あなた、ごめんなさい  
今から庄司君に抱かれる姿をみせますね」

「それでは、スカートめくって  
旦那さんに下着姿を見せましょうか」

「ん、少し恥ずかしいけど……  
あなた私を見て」



「うあっ……めぐみ……」

子供が着る縞パンツを当時のまま再現する

「よくこの下着を着てデートとしてたんですか？」



「はい、色も別にあって可愛いから良く着てました」

「部長も残念でしたね、手を出してたらこうやってめぐみさんの新しい一面を見るとが出来たのに」

「あぁっ………庄司さん」

「すぐ濡れてるね、旦那に見られながら犯されるの  
興奮してるの〜」

「ちっさなっつっ……あんとっ」

「めぐみ………」

俺は手マンされるめぐみを見ながら  
一心不乱に自慰行為に励む  
徐々に汚れていく思い出  
切なさや悲しさ色々な思い出が  
快樂のスパイスになり今にも射精してしまいそうなほど



「はあああんっ、んああっ、ああんっあん、あんんっ！」

「すごい水の音、床が愛液で染まっていますよ」



「だめっ！ぐちゃぐちゃっ、旦那の目の前でぐちゃぐちゃっいん」  
「ぐちゃぐちゃっぐちゃぐちゃっ！」



「それじゃ今からめぐみさんを犯しますから  
奥様も部長に言っちゃってくださる？」

ペットに重なる二人  
庄司はめぐみの耳元に何かを伝える

「あなた私が犯されてる所を  
シコシコして見ててくださいね」

「あっ………わかったよ」

庄司が言わせたのだからが  
俺の心はグサグサと刺され  
情けなく惨めな気分だ……



「あぁっ……………入ってきてるっ……………」

「ああ！すごい男子生徒のオナペットだったためぐみさんとセックスできるなんて最高っだ！」

「ひゃううん……………あっ……………あぁっん！」

「見えますか部長！あなたの学生時代の奥さんを僕みたいなヤリチンに犯されていますよ！」

「ふぁぁん！はげしいっ！だめええっ……………」

めぐみの中に大きいペニスが入り込まれる  
俺の色あせない濃い思い出が塗り替えられる

ぽちゅっ

ハッ  
ハッ  
ハッ

ズッ  
ズッ  
ズッ

ぽちゅっ

ハッ  
ハッ  
ハッ





「ズルズル…」

ビクンとよじれシーツをぎゅっとつかむめぐみ  
いとも容易くイカされてしまっておた

ビクン

ズルズル

あは

「めぐみ、もうイッたのかー?」

「ごっごめんなさい……あなたのペニスと違って  
庄司さんのペニスと私のヴァギナが相性がよすぎて  
すぐイッてしまうんです」

事実を淡々と述べるめぐみとは対照的に  
俺はショックを受けていた  
学生服時代のめぐみに言われているみたいなのが  
興奮し、また射精してしまった

もうすでに5回も射精してる





思い出がよみがえる  
妻との出会い、告白、デート、初キス  
走馬灯のように思い出が駆け巡る

あは

「めぐみ……愛してるぞー愛してるからなうー」

「あああんー私も愛してますっ！あんああっ  
イッちゃうそうっ……っ！」

「どうに致しますっ……」

「そっとなんか……んんん……間かならっっっ！」

「中々田……いっも良……っ……」









「思ってた以上に中に入っっぱら田でしまいました」

「庄司君の熱さの感じがすごいです」

「めぐみ……」

「それじゃ出し終えたので抜きますね」

「あ……」

「あ……」

「あ……」

「あ……」

ペニスを抜くと庄司が言った通り  
大量の精子が漏れ出した

「あんっ……んん……」

めぐみの下半身がまだ痙攣しビクビクと震えている  
その姿がとてもしゃくしゃく  
俺との事後とは全く違ったエロさだ



「部長、今度は僕のお願ひきりつけてくれないか？」

「お願い？俺が出来る事ならやるが」

「夫婦の営みを僕に見せ貰えませんか  
部長とめぐみさんが愛し合ってる姿が  
どうしても見たくなくて」

わ  
わ  
わ

「なっ……学生服のめぐみと……」

「めぐみさんも良いですか？」

「……あなたのおマンコだいたいっ」

「わかった……愛し合おう」

俺はめぐみの冷めやまらない  
熱いマンコの中に挿入した

「あっん……あなた入ってきた」

「あめ、感じるぞめぐみのまんこさ……」

「私も感じます、あなたの愛が」

おんっ

おんっ

おんっ



「ああああ、はあああんっ！」

昔のめぐみを今抱いている  
過去に出来なかったことを  
そう思うと胸があつくくなる

「めぐみの中がこんなに気持ちよかったの」

初めてセックスした時を思い出す  
あの時も猿みたく何度も何度も  
めぐみの体を貪り犯し続けた

はちゅっ  
はちゅっ

はちゅっ

はちゅっ

はちゅっ

はちゅっ

はちゅっ



「もう、誰にも渡さないからな  
めぐみ！」

「嬉しーっそーう言ってくれないっ……んんんー！」

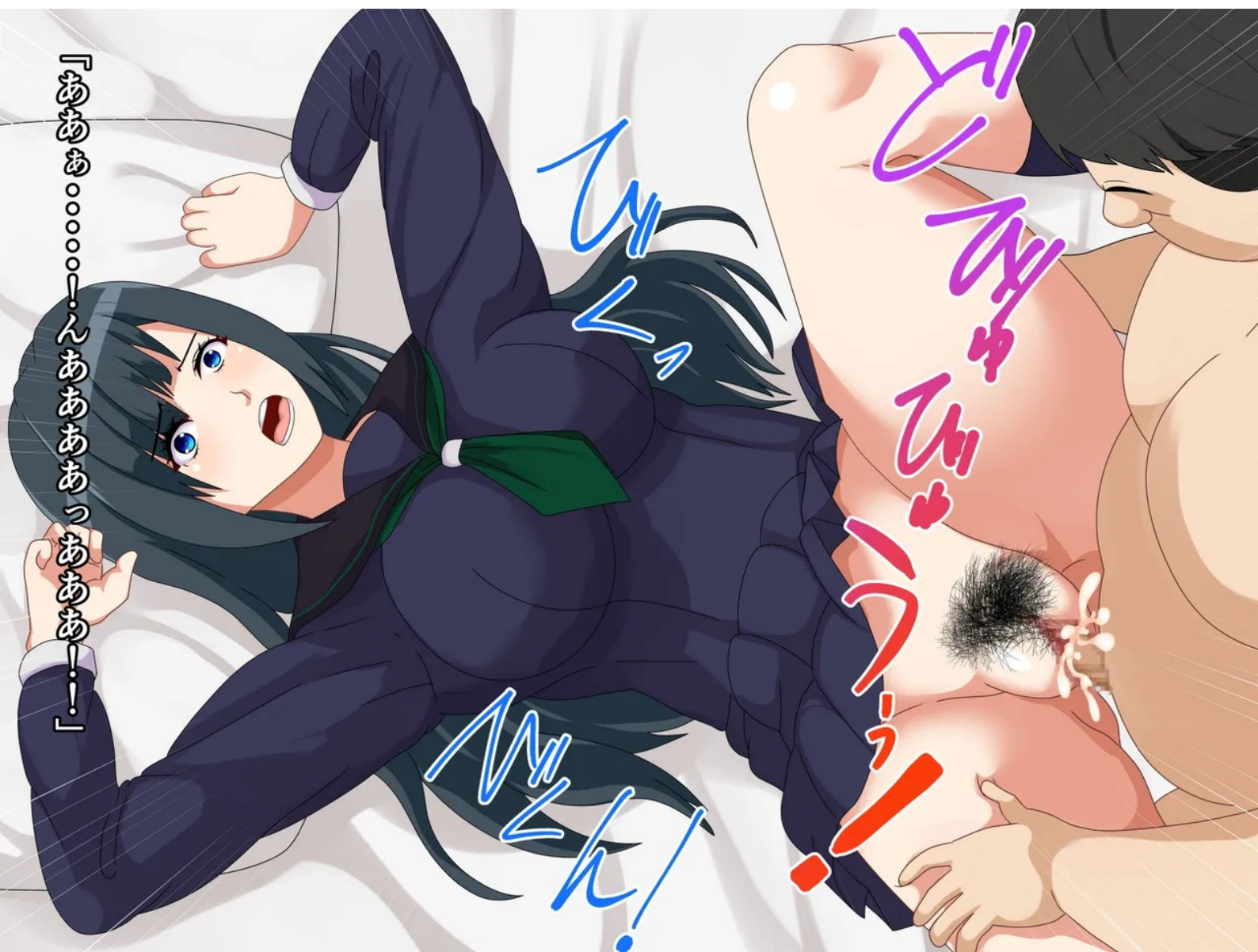
「好きだめぐみ……！」

「ああんー私も好きッーすきッーッー！」

腰を振りめぐみの中を今までにないくらいかき混ぜる







「あああ.....んあああっあああ.....」

びん

びん!

びん  
びん  
びん  
びん



「あっはぁん……あぁっ」

「あぁぁ……あぁぁっ」

「んっ私も愛してる……」

「二人とも、熱いっすね」

ドカン

ムンッ…

あぁ

あぁ

庄司君ありがとう、君の協力のおかげで  
また夫婦円満の性生活ができる  
本当に助かった」

「例は良いですよ、僕も二人を見て愛の何かを知りました  
もう一度プロジェクトに参加してやり直します！  
後は、夫婦水入らず邪魔ものはさりますかね」





「めぐみ……♡♡」

「あなた……」

色々あったがEDも治り  
またいつも通りの夫婦として  
やっていくことが出来るだろう